

たぬき 狸

「平成狸合戦ぽんぽこ」は、1994年に公開されたスタジオジブリ製作の長編アニメーション映画ですが、そのタイトル通りに、登場する主人公は、昭和40年代に開発が進む多摩ニュータウンの一角に生息する狸です。他に、昔話の「かちかち山」や童謡の「げんこつ山のとぬきさん」などにも狸が登場するところから、狸は日本人にとって身近な動物であることが窺えます。

狸は、哺乳綱食肉目イヌ科タヌキ属に分類されます。元々、日本、朝鮮半島、中国、ロシア東部などに分布していましたが、今はヨーロッパ諸国を含め、より広い範囲で生息しています。狸は全長が50-80センチメートルで、体重が2-10キロ前後です。体色は普通、灰褐色で、目の周りや足は黒っぽくなっていますが、全身が真っ白な変種の個体もまれに存在します。狸は、河川や湖の周辺にある草原や林で生活することが多く、夜行性です。人間の影響が少ない環境では昼間でも活動します。狸には冬眠の習性はありませんが、秋になると、冬に備えて脂肪を蓄え、体重を50%も増加させる他、毛足の長い冬毛に覆われるようになります。1月から3月にかけて発情期になり、通常60日前後の妊娠期間を経て、5-7頭の幼獣を産みます。野生の環境下で、狸の寿命は10年前後ですが、ペットとしては最高16年という記録があります。狸は臆病で警戒心が強い性格なので、大きな音や急な動きなどに驚くことがあります。狸の食性は雑食で、鼠などの齧歯類や鳥類、魚類、昆虫、植物などを食べますが、近年の宅地開発の影響で、餌を求めて人里に姿を現すこともあります。ごみ置き場を漁ったり畑の農作物を掘り起こしたりする被害を起こしてしまうため、日本では「有害鳥獣」に指定されています。

「かちかち山」の狸に代表されるように、鎌倉時代から室町時代の説話に登場する狸には、時に人を殺めることもある恐ろしい化け物として描かれることが多いです。それが江戸時代に入ると、腹が膨れ、腹鼓を打つイメージへと変化していきま

した。その腹鼓はらつづみの音を表す「ポン」や「ポンポコ」などの擬音語ぎおんごは、狸きを指す俗語そくごとして今でも用いられています。現代では「狸おやじ」のように、狸がしこはずる賢い人を指すようになりました。民間伝承みんかんてんしょうでは、狸きつねも狐ばも化けるとされていますが、狐は人間の女性じょせいに化けることが多いのに対し、狸は物や建物たてももの、妖怪ようかい、他の動物等どうに化けることもあります。店舗てんばや住宅じゅうたくの前で狸の置物おきものがしばしば見かけられますが、その多くは滋賀県しがけんの信楽焼しがらきやきで、昔から福むかしを呼ぶ縁起物ふくよとして新築祝えんぎものいや開店祝しんちくいわいや開店祝かいてんなどの進物しんもつに選ばれてきました。狸しがらきやきの信楽焼は立っているものからごろ寝ねをしているものまで姿勢しせいが様々さまざまで、サイズ、デザイン、色も豊富ほうふです。産地さんちでは11月8日が「信楽たぬきの日」とされており、信楽しがらきの駅えきや東京メトロ有楽町線ゆうらくちょうせん有楽町駅ゆうらくちょうえきの「ぽん太たの広場ひろば」のように、狸の置物あつが集まっている場所ばしょもあります。また、天ぷらてんぷらの揚げカスあを種たねに入れたうどんいや蕎麦そばは「たぬきうどん」「たぬきそば」と言い、狸いという言葉ことばがいかに日本人せいこつの生活しんどうに浸透しんとうしているかが分かります。

定番ていばんペットの犬くや猫めずらに比べるとまだ珍しいめずらかもしれませんが、時代じだいと共に変化ともしてきたペットせんたくしの選択肢さいきんの中で、最近ちゅうもく、狸も注目ちゅうもくされるようになりました。もともとペットとして飼われる動物かではないので、迎える側どうぶつとして色々むかと注意がわする必要があるいろいろようですが、いずれにしても、狸はこれからも末長くすえなが人間にんげんと共存きょうそんしていければと願ねがいます。